

Precursor —先駆者—

さくら診療所理事長

吉田 修



取材：中村敬彦
文：桑畑裕子
撮影：田口昭充

徳島の診療所を舞台に 2つの医療を展開

徳島県北部のほぼ中央、徳島市から吉野川を30キロメートルほど遡った吉野川市山川町に、さくら診療所はある。19床のベッドにデイクエアリハビリティ施設も備えた同診療所の理事長を務めるのが吉田修氏だ。在宅医療にも対応し、医療・介護の両面で地域の人々の要望に応えている。現在、ここで働く医師は吉田氏を含めて3人。地域医療に力を注ぐのはもちろんだが、もうひとつ、彼らが積極的に取り組む命題がある。それは国際協力だ。

医師の国際協力といえば、「後進国での献身的な診療行為」のイメージが強いが、吉田氏は、アフリカのザンビアを中心に保健医療、農村開発などの国際支援活動を行うNPO法人「徳島で国際協力を考える会（TICO）」の代表であり、彼らの協力活動は医療の枠をはるかに超えたものになっている。

「私自身も、合わせて5年弱はアフリカやアジアの国々でさまざまな支援活動を行ってきましたが、今は海外で支援活動をする若い人々をサポートする立場にまわっています。」

徳島での地域医療の実践が、国際協力の継続的な活動を可能にし、国際協力をしていくからこそ、充実した地域医療が展開できる。そんな環境を実現できました」

「国際協力」と「地域医療」。2つは、さくら診療所を舞台にして、どのようにつながっているのだろうか。

医師人生の方向を変えた 青年海外協力隊への参加

開業医の家に生まれた吉田氏は、父の姿に憧れ、自然に医師を志すようになる。宮崎医科大学を卒業後、地元の徳島大学医学部第2外科（心臓血管外科）に入局。通常であれば、そのまま勤務医になるところだが、医師になって7年目に青年海外協力隊に参加する。他人には一大決心のように思えるが、動機を尋ねると困ったようにこう答えてくれた。

「『なんとなく』という表現が適当かどうかわかりませんが、特別な契機があつて海外へ行こうと決心したわけではないのです。強いて言えば、研修と地方病院での勤務を終えて大学病院へ戻り、ひと区切りだったので、気分転換を試みたかったのかもしれない」

青年海外協力隊員の派遣期間は2年。吉田氏が派遣されたのは、アフリカ南部の小さな国マラウイの国立病院だった。ベッド数300の病棟に800～900人の入院患者がとどろ狭しとひしめく中、医師は吉田氏を含めてたったの5人。しかも、外科医は彼だけだった。

「できる限り手術をしました。自分としては一生懸命やったつもりで、何百人かの命を救えたとは思います。しかし、2年の任期が終わるころ、後任の外科医が必要だと事務局に報告しても、後任は見つからないまま。自分が帰国してしまえば、現地の状況はまた元に戻るだけ。無力感ばかりが残りました」



モザンビークの戦争孤児たちと



モザンビークにて巡回診療中。2人のお子様とともに



青年海外協力隊時代、マラウイのゾンバジネラルホスピタルにて、ヨーロッパの医学生に実習を

NGOの活動で痛感した 長期的支援の必要性

強い無念からか、日本に帰国して大学病院に戻った吉田氏の中で、明らかに変化が起こった。

「100円か200円の治療費があれば助かる子どもたちの命が、次々に失われていく現実を目にしたあとでは、日本で何百万円もかけて行われる高齢者の心臓バイパス手術が、妙に色褪せて見えたのを覚えています」

心臓血管外科の世界に戻る気になれず、かといって心の整理がつかないまま2年ほど勤務をつづけ、「貧しい社会を変えるにはどうしたらいいのか」を考えていた。そんなときにNGOのアジア医師連絡協議会（AMDA）に出会う。

「途上国への支援は、10年、20年といった長期的なスパンで、現地の人といっしょにやっていけるような開発が理想。ならば、一個人で活動するのではなく、このNGOの活動に参加してみようと思いました」

約1年半、AMDAの専任医師としてインド、ネパール、ルワンダ、レバノン、モザンビークなどへ、医療プロジェクトの指導のために赴任。日本に戻ると、「徳島で国際協力を考える会（TICO）」を設立する。そして今度は、吉田氏が深いかわりを持つようになるアフリカのザンビアに初めて足を踏み入れる機会が巡ってきた。国際協力事業団（JICA）とAMDAがザンビアで5年計画の技術協力プロジェクトを発足し、その計画づくりのために現地

ザンビアは、アフリカ南部の内陸部にある国。吉田氏が初めて訪れた1995年当時、平均寿命は45歳くらいだったが、ここ5年ほどは37、38歳まで下がっており、5歳までの死亡率が18%にも上る。

「内戦などの戦禍がなくても、大干ばつと大洪水で土地が荒れて食料は不足し水も足りず、HIVやマラリアが蔓延して平均寿命が下がっているのです。こうした地域では、診療所の再建などの医療援助だけでなく、井戸を掘る、学校をつくるといったところからの長期的な開発が不可欠。JICAとのプロジェクト計画づくりに半年かわり、納得のいく長期的な国際支援のかたち

国際協力の拠点となる 診療所を故郷に開業

日本の医療関係者でも、国際協力に関心を持つ人は少なくない。しかし、海外へ出ている間の金銭的な負担や、帰ってきてからの仕事復帰の困難さを考えて、二の足を踏む人が多いのもまた事実だ。何度かボラティアで海外に行ったとしても、歳を重ねるにつれ、身分の保証のない不安定な生活をつづけるのは厳しいだろう。

ザンビアから帰国した吉田氏が考えたのは、海外支援に行く医師たちが、安心して日本に帰ってこられる拠点づくりだった。「日本に戻ってきたときに働ける場所が確保されていれば、安心して海外支援に出ることできるでしょう。これを実現するために、私の地元

に、私の地元



ほたる川（徳島県）を美しい川に戻すための「ほたる川清掃」にボランティアで参加



大干ばつに苦しむザンビアの子どもと



ルワンダの病院にて。いっしょに写っている医師の父も内戦で殺されたという



PROFILE

(よしだ・おさむ)

- 1983年 宮崎医科大学医学部卒業
徳島大学医学部第2外科入局
- 1984年 高知県土佐市民病院勤務
- 1985年 小松島赤十字病院勤務
- 1988年 徳島大学医学部附属病院勤務
- 1989年 青年海外協力隊でマラウイ国ゾンバジェナルホスピタルへ派遣(2年間)
- 1991年 徳島大学医学部附属病院心臓血管外科入局
- 1992年 徳島県立病院勤務
- 1993年 アジア医師連絡協議会専任医師として、インド、ネパール、ルワンダ、レバノン、モザンビークの医療救援プロジェクトへ赴任
徳島で国際協力を考える会(TICO)を設立
- 1995年 国際協力事業団医療協力部医療専門家としてザンビア保健省ヘッドバイザーとして赴任
- 1996年 国際協力事業団医療協力部ザンビア国PHCプロジェクト長期調査員としてザンビアを訪問
菅波内科医院勤務
ザンビア国にオレゴン大学大学院OB/OG会とともに現地NPO国際協力団体SCDPを設立
- 1997年 徳島で国際協力を考える会(TICO)の顧問として、同団体活動のアドバイザーとなる
ホウエツ病院勤務
- 1999年 さくら診療所開業

現地での支援も、医師の国際協力も
継続できなければ意味がない。



なく海外支援に出られるシステムをつくるため。現在、さくら診療所の医師たちは、帰国後の勤務先の心配をせずに、交代で国際協力活動に参加しているそう。

ところで、吉田氏が代表を務めるNPO法人TICOは、1997年からザンビアでの国際協力をつづけている。水、農業、医療、教育を軸とした持続可能な干ばつに強い村づくり。自分たちの健康を自分たちで守れるように、スラムに住む女性たちを教育してコミュニティーヘルスワーカーを養成すること。また、栄養改善への取り組み、救急搬送システムのなかった首都ルサカに10年がかりで救急車による搬送システムを整備するなど、活動は多岐にわたる。

最近、バン格拉デシユのグラミン銀行を範にして、起業したい人に無担保で少額の資金を融資する制度も始めた。養鶏や養豚がしたい、保育所をつくりたいといった意欲のある人に、事業の計画書を提出してもらい、数百ドル程度の融資を行う。融資したお金が戻ってくるとは思えないと反対する声もあったが、これまでの20件ほどの融資では予想以上に事業はうまくいき、融資金も回収できているという。

「私たちの活動は、欧米のNGOのような大規模な支援ではなく、本当に、小さなこと。です。けれども、ただ資金を融資するだけではなく、たとえば鶏や豚の飼育法を指導するなど、事業を成功に導くサポート

もします。それは私たちの支援がなくなっても、地元の人たちで持続可能な、循環型の開発や事業でなければならぬと考えているからです」

TICOでは、海外での国際協力を進めるとともに、国内でも医学生を対象とした合宿プログラムや、一般の人を対象に「地球規模で考えながら地域から活動していく」をテーマとした公開セミナーを月1回開催するなど、さまざまな啓発活動を行っている。

「私たちは、途上国の現状を目にしたとき、日本とくらべてあれが遅れている、これが足りないと考えがち。けれども最近、私たちがいいと思ってきた豊かさは、間違っているのではないかという気もしています。ザンビアの平均寿命が下がったのは、気候変動によって繰り返されている大干ばつと、大洪水が大きく影響している。その原因となっている二酸化炭素を排出したのは、ザンビア人ではなく、実は我々先進国の人間ですから」

国際協力ができて 地域医療も支えられる制度

海外支援目的で開業したとはいえ、さくら診療所が担うべき役割は、当然だがそれだけではない。

「海外支援に興味を持つ人は、困っている

人を見捨ててはおけないという人ばかり。ですから、国際協力したいと願う医師たちは地域医療にも熱心です。しかも災害医療に強い人が多いので、地域住民にとって心強いのではないのでしょうか」

都心部から離れた地域で医師不足が深刻化している今、自治体にとっても地域医療にたずさわる医師の確保は喫緊の問題。徳島県では吉田氏が行ってきたさくら診療所やTICOの活動に県行政が関心を寄せ、新たな動きが生まれようとしている。県では医師不足解消に向け、3年契約のうち2年を徳島県の地域医療に従事すれば、残りの1年は自由な研修活動をもかまわななどの条件で、地域医療を担う医師の確保に乗り出した。そこで、吉田氏に連携の提案があったという。

「その有給の1年を使って国際協力に参加できるのであれば、私たちには願ったり、叶ったりです。医学生の中にも、国際協力に情熱を持っている人がたくさんいます。近年中には県と連携して条件を整え、国際貢献を志す医師が徳島県に集まる仕組みをつくりたい。実現すれば、徳島県の地域医療にも希望が出てくると思います」

国際協力活動では、現地で、持続可能な支援システムを心がけてきた吉田氏。国際協力を志す後輩医師たちのために、我が国に、持続可能な派遣システムを構築してくれるはずである。